

## 文 献 紹 介

Terry G. Jordan 著: *North American Cattle-Ranching Frontiers: Origins, Diffusion, and Differentiation*.

University of New Mexico Press (Albuquerque)  
1993年, 439p.

アメリカ合衆国には多様な農業形態が存在するが、それらのなかでこの国をもっとも連想させるのは牧畜であり、とくに自然牧野を利用した自由放牧である。この農業形態がアメリカ西部の草原地帯に形成されるようになった過程を、旧世界にまでさかのぼって検討したのが本書である。副題の「起源、伝播、地域分化」は非常に刺激的であり、これだけで興味をそそられる。

著者のテリー・ジョーダンがアメリカを代表する歴史・文化地理学者の一人で、北アメリカにおけるヨーロッパ系移民の植民や文化を中心課題として、精力的に研究成果を発表している。初期の仕事としてはテキサスにおけるドイツ系農民の研究<sup>1)</sup>があるし、最近では東部の森林地帯における開拓を論じている<sup>2)</sup>。私がジョーダンに対して好感をもつのは、彼が地理学という看板を前面に出していることである。彼は本書のまえがきのなかで、この本は視野と内容の点で修正主義 (revisionism) 的であり、本棚に並べておく価値があると自負しているが、それは、著者が地理学者としての訓練を受けたためであるとしている。地理学はさまざまな研究領域の成果を利用するという学際的・統合的な学問であるし、それと同時に一次資料を利用した研究方法をもっている。このような地理学の観点から、古いテーマであるアメリカの牧畜を検討しなおすと全く新しい世界が見えてくるというわけで、したがって修正主義的なのである。

本書は10章から構成されている。まず、第1章では、放牧業の特徴が提示され、従来の諸説が批判され、彼自身の見解の概要が示されている。農業の一形態である放牧は、自然環境に対する適応戦略であり、その形態は地域的に多様である。伝統的な牛の放牧は自然植生を肉・皮・骨・油に変換する活動であり、この適応形態には放牧に携わる人々の文化的伝統と自然環境が反映されている。つまり、フロンティアにみられるさまざまな牧畜の形態は、人間が

土地を利用するための適応戦略としてエコロジカルに解釈すべきものである。また、放牧は南北アメリカの多様な環境のもとで繁栄したが、いずれの場所でも持続的な適応戦略となることはなかった。過放牧は環境破壊をもたらし、恵まれた環境に移動することが新たな適応戦略となった。また、人口増加の影響や他の土地利用からの圧力を受けるようになった。このように、放牧は、土地利用の圧力が低く人口が希薄な辺境的な環境のもとでのみ存続することができた。

このような議論から、アメリカの放牧に関する従来の見解が批判される。歴史家ウェッブ (Walter Prescott Webb) の『大平原』は古典として著名であるが、アメリカ西部の環境が半乾燥であるために放牧が生まれたという考え方は、環境決定論であるとして否定される。歴史家ターナー (Frederick Jackson Turner) は、アメリカにおけるフロンティアの展開を発展段階モデルでとらえ、毛皮交易者・狩猟民、牧畜業者、パイオニア農民という段階をへて文明が進むものと解釈した。しかし、放牧はフロンティアに限定されてはいないし、すべてのフロンティアが経験したものでもなく、また、フロンティアが消滅したあとも持続する場合があった。このように、ターナーは経済決定論であるとして否定される。チューネンの土地利用モデルを適用して解釈することも同様に批判される。つまり、複雑な現実の世界を単純なモデルで説明することは、歴史をあいまいにする行為であり、人間の伝統、創意工夫、偏見、事件、不順応、不合理性などを検討する余地を残さない。牧畜フロンティアはコンテクストにおいてのみ説明が可能であるとしている。

このようにジョーダンは移民が持ち込んだ文化的伝統を重視しており、彼が用いている概念は前適応 (preadaptation) である。すなわち、文化というものを自然環境への適応戦略としてとらえる文化生態学の見方にしたがうと、人間の集団がもつ文化は、別の場所に移動した場合に、新しい環境を占有するための競争力となる。ヨーロッパからやってきた移民のなかには、特定の環境を植民・開拓するために前適応していた人々がいた。ヨーロッパから導入された文化特性がアメリカの農村地域でどの程度存続

できたかは、前適応の度合いを反映しているというわけである<sup>3)</sup>。放牧はフロンティアや半乾燥の西部で生まれた生業形態ではなく、移民によって旧世界から持ち込まれたものであった。移民集団のなかには、放牧によく前適応していた人々がいた。

放牧の伝統は東半球で発生し、1500年までには旧大陸の多様な民族や環境の境界を越えて広まっていた。第2章では、イベリア半島南西部、イギリスの高地、西アフリカのサハラ南部のステップを、アメリカの放牧業の起源地としてあげている。それぞれが特徴のある牛の放牧の伝統をもっていたが、これらのなかでもっとも影響力が大きかったのは、イベリア半島からの伝播であった。ここでは、南西部の低地と中西部の台地で異なった牧畜形態がみられた。グアダルキビル川下流のラスマリスマスには、2つの生態系、すなわち、湿地帯と、湿地帯周辺の森林や穀物畑があり、放牧方式は2種類の生態系に適応していた。一方、エストレマドゥラを中心としたメセタ台地西部では、ラスマリスマスとは自然環境と放牧方式が異なっており、穀物と家畜の混合農業がみられ、牛や馬よりも小型家畜（羊、山羊、豚）が重要であった。イギリス高地やアイルランド高地からは北アメリカに多数が入植したので、北アメリカにとっては重要な意味をもっていた。ここではインフィールド・アウトフィールド方式の土地利用のなかに、牛の飼育が組み込まれていた。一方、西アフリカでは、サハラ砂漠とギニア沿岸地帯に挟まれ雨季と乾季のある地域で、フラニ族などによって遊牧性の強い放牧が行われた。

以上のような旧世界の大西洋岸にみられた3つの放牧文化が遭遇したのが西インド諸島であり、この地域への移植と適応のプロセスが第3章で論じられている。ヒスパニオラ、ジャマイカ、キューバ、プエルトリコなどの島々には、イベリア半島、アフリカ、イギリスから牛の放牧の伝統をもった人々が流入し、牧畜の多様な様式が到来したが、それらの中からアメリカの環境に適した放牧方式が融合・形成された。

これらの島々から大陸部への人々の移動にともなう、メキシコやアメリカへと放牧の伝統が伝播し、それぞれの地域の自然環境に適応することによって牧畜業が形成され、さらに時間の経過とともに放牧地帯が移動した。第4章では、西インド諸島からメキシコのベラクルスやパヌコデルタへの伝播と、さ

らにメキシコ高原への移動について、また、フロリダ、サウスカロライナ、ルイジアナへの伝播が検討される。第5章では、メキシコ中央高原からメキシコ北部へ、さらに太平洋岸に下ってから北上してカリフォルニアへの伝播ルートについて、また、メキシコ湾岸に沿ってテキサスにいたる伝播ルートが検討される。第6章では、サウスカロライナから南部の森林地帯に沿ってテキサスへの伝播ルートと、アパラチアを越えてプレーリーへの伝播ルートが論じられる。第7章と第8章では、テキサス方式の放牧とカリフォルニア方式の放牧が北方へと拡大したが、寒冷で乾燥した環境への不適応を起こして衰退した経緯が述べられている。さらに第9章では、ミズーリを中心とした草原で形成された中西部方式の牧畜方式が適応力に富んでおり、イギリス高地の伝統を受け継いだこの方式が西部の全域に広がっていった経緯が詳細に考察されている。

それぞれの地域における適応形態や伝播を論じる際には、自然環境、牛の種類、労働力、犬の使用、カウボーイの流儀、群れの管理法、季節移動、焼き印、投げ縄、囲い、他の家畜の重要性、土地制度、法体系、肉や乳製品の利用、牧畜関係の用語などについて、詳細に検討されている。多様な牧畜の形態に関するこうした緻密な分析を、旧世界から西インド諸島を経由してアメリカ西部に到達するという、地域的・歴史的な枠組みにうまく組み込んで展開されるストーリーは迫力満点である。新大陸の牧畜については、ピシュコの古典的な業績があるし<sup>4)</sup>、テキサス大学で著者の同僚であるブツァーも論じているが<sup>5)</sup>、ジョーダンによって研究のフロンティアはさらに進んだといえる。

ジョーダンのスタンスはきわめて伝統的な地理学である。結論の章で彼は次のように述べている。本書に一つのメッセージがあるとすれば、それは、新大陸には均質な放牧フロンティアが存在したとか、旧世界の放牧の原型は一つであったとか、特定の自然環境とか市場へのアクセスが放牧業を発展させたといった、安易な一般化は避けるべきだということである。それぞれの放牧フロンティアはユニークで、それは人間と場所が偶然に出会った結果として生まれた。社会科学者は科学という玄関口に置き去りにされた捨て子であり、生みの親は、一般性を拒否してユニークさを理解することに情熱を燃やすヒューマニストではないのか。放牧フロンティアを理解す

るためには、規則性や法則を追求する科学者としてよりも、ヒューマニストとしての立場からの検討の方が有効である……。私にはジョーダンが多くの文化・歴史地理学者たちの心情を代弁してくれているように聞こえた。ともかく、壮大な構想と詳細な分析がバランスよく提示されたこのような本を読むと、地理学というのは実におもしろい学問だと認識を新たにさせられる。

[注]

- 1) Jordan, T. G. (1966): *German Seed in Texas Soil: Immigrant Farmers in Nineteenth-century Texas*, Austin: University of Texas Press.
- 2) Jordan, T. G. and M. Kaups (1989): *The American Backwoods Frontier: An Ethnic and*

*Ecological Interpretation*, Johns Hopkins University press.

- 3) Jordan, T. G. (1989): Preadaptation and European colonization in rural North America, *Annals of the Association of American Geographers*, 79, pp. 489-500.
- 4) Bishko, C. J. (1952): The peninsular background of Latin American cattle ranching, *Hispanic American Historical Review*, 32, pp. 491-515.
- 5) Butzer, K. W. (1988): Cattle and sheep from Old to New Spain: historical antecedents, *Annals of the Association of American Geographers*, 78, pp. 29-56.

(矢ヶ崎典隆)